



NO.426

R5年2月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

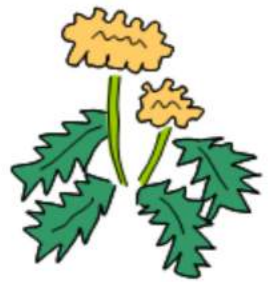
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「コロナ後に思いをよせて」

施設長 木下昭一

思い返せば3年数か月前の11月、中国を起源とする得体の知れないヤツは、人の体を介して着々と成長を続ける。初期段階では、どこかしら「テレビの向こう側の情報」的な感覚で、まだその時は実際に何が起こっているのか、どんな危機や危険が迫っているのかも良く解らないまま、見えないヤツの恐怖に不安を感じつつも、「まだまだ大丈夫だろう」と高を括っていると、あっという間に日本国に迫って来た。当時、「海上に停泊する豪華客船の中は、どんな状況」であつたのだろうか。

その後、幾日も経たないうちに「新型コロナウイルス」と名されたヤツは、日本国内のみならず世界中で猛威を振るい続け、パンデミックへと陥れた。

ワクチンの出現と共に一旦は下火になっても、次々と生き残りをかけて変異していき、その度ごとに新たな勢力を得てはまた下火になる…を3年以上に亘り、幾度となく繰り返しながら今に至っている。

あくまでも私見として、日本は諸外国と比較すると、それほどの壊滅的なパンデミック状態には至らなかつたように思える。一方でヨーロッパ諸国では爆発的感染拡大を招いた事で、回復期には「集団免疫を獲得した」と捉え、感染予防対策としてのマスクの着用や、人と人との距離を取る等の対策を止め（昨年中東のカタールで開催されたワールドカップサッカーの応援で、テレビに映る人達の殆どがマスクをしていなかったのが、記憶に新しい）、コロナ禍前の生活に早い段階で戻した海外と比較

すると、逆にこれだけコロナ禍前に戻すまでに長引いているのは、ある意味日本人の「生真面目さ」の証明でもあるように思う。

遅ればせながら、先日政府の方針が出され、「感染症法」としての新型コロナウイルスの位置付けを、5月8日をもって2類…（感染した時の重症化など危険性が高い感染症）から5類…（感染力や重症化など総合的に危険性が低い感染症）インフルエンザと同等の扱いへと引き下げられる事が決まりました。

また、マスクの着用についても3月13日以降は、「個人の判断に任せる」との方針が打ち出されました。そこで気になるのは、多くの人が集う卒業式。それについて「国歌や校歌斉唱の際」は、マスクを着用し、それ以外の場面ではマスクを外して良い

という見解です。

国民の一人として「心強い点」は、国内メーカーが開発した治療薬が承認され、我が熊本が誇る製薬メーカーが開発しているワクチンの治験が始まり、承認へ向けてカウントダウン状態となつている不活化ワクチンの存在が大きい。（決して外国産ワクチンを否定するものではなく、より日本人の体質等に考慮されているであろうワクチンや、また副反応が起こりにくい点に期待する）

コロナ禍によって、制限され、失った時間を巻き戻す事は出来ない。奪われた多くの人の出逢いを取り戻すも出来ない。出来るとするならば、このコロナ禍で感じた「限られた時間を大切にする」事や「一日一日を精一杯生きる」事など、収得した経験をどのように活かし、より充実した時間を過ごせるか、ではないだろうか。

一刻も早く多くの人と集い「コロナ？ そんな事もあったよね！」と想い出として語る日が来る事を待ち望みたい。



2月



1班 「苺で幸せいっぱい」

あっと言う間に正月休みも終わり、作業に追われる日々が帰って来ました。そんな中、皆さんが楽しみにしているレクリエーションがありました。この日は、竜北方面に苺狩りに出掛けました。朝からソワソワしている利用者さん達ですが、レクリエーションの内容が伝えられるとテキパキと身支度を済ませ、バスへと乗り込み、さあ出発です。久しぶりのお出掛けで利用者さん達もニコニコ笑顔いっぱい、貸し切りのビニールハウスの中は苺の甘い匂いでいっぱい、苺を食べると口の中は幸せがいっぱいでした。特に利用者のAさんは、赤い大きな苺を選んで何個もパクパク食べられていました。「食べ過ぎないか」と心配でしたが、その後のおやつ購入もあったので、セーブもしっかりされていました。甘い苺で幸せな一日になりました。また、忙しい日々が続きますが、利用者の皆さんと一緒に楽しく毎日を過ごすことを目標に頑張りたいと思いました。

支援員 中村 照美



2班 「悩み抜いた一年目」

昨年4月に新卒で入職しました。大学では福祉を専攻していましたが、実際に利用者の方と関わると、利用者の方が思っていることを上手く汲み取ることが出来ない、私が伝えたいことが上手く伝わらないなど、様々な壁に直面しました。入職当初は日々悩み、考える毎日でした。先輩スタッフや上司の方に助言を頂くことで、伝える際には話し言葉だけでなく、ジェスチャーや文字を用いることで、より伝わりやすくなるということを知り、様々な方法で利用者の皆さんとの関わりを深めていきました。このような関わりの中で、利用者一人ひとりに合わせて伝え方を変えていく事が、よりよい関係の構築に繋がることを学びました。

また、利用者の方の障がい特性を私が理解しておらず、私の基準で判断してしまう事も多くありましたが、関わりの中で少しずつ利用者さん個々の特性を理解出来るようになってきたのではないかと考えています。これからも、日々悩みながら、利用者の方一人ひとりに寄り添った支援を心掛け、更により良い関係が作っていけるように、今後も利用者さんの特性の理解を深めていきたいと思っています。

支援員 白石 峻真

3班 「頼りになるBさん」

3班では毎日20kg入りの玉葱を20箱から時には30箱、そして10kg入りのみかんを10箱袋詰めしており、毎日楽しくも忙しい日々を送っています。利用者の皆さんは、野菜作業が来ると黙々と作業に取り組み頑張られています。袋詰めが終わると、次は納品です。お店に行くと、20kgの重い箱を5段程積み上げないといけません。これが女性にはとても大変です。しかし、時々利用者のBさんがその納品のお手伝いをして頂くことがあります。

納品先の方もBさんを見ると、「お手伝いに来たね～」と声を掛けて下さいます。Bさんも声をかけられると「うん」と頷かれ、その後すぐに野菜運び始められます。その姿を見て「頼りになる利用者さんがいて良いですね～」、「また来てね～」と言って下さいます。勿論、私も感謝しかありません。私自身も、もう少し体力をつけて、納品を最後まで出来るようになりたいです。Bさんいつもお手伝いありがとうございます。

支援員 園田 真紀



4班 「寒さに負けるな」

高齢者が冬に注意しなければならないことが8つあると言われています。低体温症、インフルエンザ等の感染症、脱水症等ありますが、中でも私自身1番注意する必要があるのではないかと感じるのは“ADLの低下”です。ADLとは、食事や更衣等人が日常生活を送る上での必要最低限の動作のことをいい、これが低下してしまうと生きがいや役割を見出せなくなり、身体的、精神的にも機能が低下すると言われています。

新年を迎えて間もなく、班利用者1名が入院されました。理由はイレウス（腸閉塞）でした。幸い、手術をするには至りませんでした。腹痛と嘔吐は想像を絶するものだったのではないかと思います。何故イレウスになってしまったのか。医師から「原因の1つは年末年始の期間に身体を動かさず、腸の機能が低下してしまったためではないか」とのことでした。寒くなると少しの外出すら億劫になりがちですが、丈夫な身体、健康を維持するためにも、寒さに負けず、身体を動かさなければならないと強く感じた新年の始まりでした。

副主任 清田 健士郎

5班 「年はじめ」

年末のお休みを楽しまれた皆さんは仕事初めの4日に、「明けましておめでとうございます」と大きな声での挨拶とともに元気な姿を見せて下さいました。5班では毎年恒例となっている初詣を6日に行っています。今年も三気の里の近くの窪田阿蘇神社に行きました。利用者の方もお賽銭を入れて参拝をしました。また、宮司さんもおられたのでお祓いもしてもらいました。みんなのようなお願い事をしたのだろうと思いました。

その後の創作活動では手形でだるまを作っています。顔も利用者さんが手を使って描いていたので、個性的な顔になっていました。創作活動では慣れた様子で手に絵の具を塗り、手形を取られていました。園でも色々な活動が出来る流れになってきていますが、まだコロナ禍は続きます。その中でも、どうすれば今年1年間を利用者さんが笑顔で過ごせるのかを、スタッフ皆で考えていきたいと思ひます。

支援員 中村 圭助

療育雑記

「これからの福祉の話をしよう」

主任 佐藤 和也

二〇五〇年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現することを目標とする。その背景には、様々な価値観を持つ人々

によるライフスタイルに合った社会参画を実現するため、身体的能力、時間や距離といった制約を、身体的能力、認知能力及び知覚能力を技術的に強化することによって解決する。この文は、「やりすぎ都市伝説」などではなく、内閣府のホームページに「ムーンショット計画」として明記されていることです。私の頭では到底理解できない内容でしたが、「ドラえもん」のような世界が実現可能な時代に突入しているのでは

う。

福祉の世界にも随分前からロボット参入の可能性が言われていました。が、当時の私は「ロボットに福祉の仕事はできない」、「人がロボットの支援や介護を受けて心地よいわけがない」と思っていました。しかし、高い倫理観やセルフコントロール技

術を要求される福祉の現場において、絶えない虐待報道を見たり、私自身も感情のコントロールに悩んだりする中で、人が福祉の仕事をするよりもロボットやAIの方が利用者は心地よくサービスを受けて生活できるのではないかと思うようになりました。

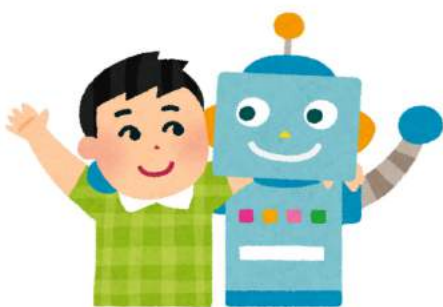
先日テレビで見た腕型のロボットは生きた細胞で作られており、ゲームのAI「LamaDA」はエンジニアとのやり取りの中で感情が芽生えたかもしれないというニュースもあり、現代の科学はかなり進歩しています。そういったニュースを観ると、ロボットが自閉症のある方をどのように支援するのだろうか？と考える時があります。センサー搭載でバイタルチェックを行いつつ、WiFiを通して記録を入力。繰り返しされる同じ質問にもAIがその都度丁寧に受け答えをし、それぞれの特性に合わせた環境調整や言葉掛けをベ

面、人間の支援員が勝てる要素は全くないと落胆します。この先、人の仕事はロボットに奪われていくという言葉を耳にしますが、福祉も例外ではないと真剣に考えるようになりました（私が生きている間に実現するのかな？笑）。

また、ムーンショット計画には「様々な背景や価値観を持つ人々によるライフスタイルに合った社会参画を実現する」ため、コンピューターの中に構成された3次元の仮想空間でアバターを使って多様なライフスタイルの追求とあります。ここで言っているアバターを使ってというのは、スマホを使ってアバターを操作するのは訳が違います。人の意識をモノに移すという段階にまでできており、仮想空間内を自分の意識で活動するという、考えられないようなことが可能となるようです。私の頭ではこの先どのようなことが可能になるのか、どのような世界になるのか想像もできませんが、近い将来には福祉もテクノロジー化していき、そして脳の器質的な障がいや身体的な障がいも、取り除くことや治療することが、なんらかの技術で代替えることができるようになるかもしれない。そして「障がい」という概念もなくな

り、福祉の仕事が必要としない時代になるかもしれない。障がいがないなるということが良いか悪いかという判断も難しいと思いました。みなさんはどのように考えますか？本当にそのようなことが可能なのかかわかりませんが、ロボットやAIとの共生・メタバースの時代が来るかもしれないと思うと、今当たり前に福祉の仕事をしていることを考え直し、福祉について、人の権利について、支援について真剣に考えて利用者さんに接していきたいと思いました。人を支えるのはやはり人でありたいし、自分も人に支えられたい。人は難しいことも多々あると思います。が、人にしかできないこともある。私自身、人として、福祉人として課題が多いのですが、テクノロジーの進歩と同様、進歩していきたいと思

いました。



委員会

「ハラスメント委員会」

支援員 八木 良江

12月は、ハラスメント撲滅月間でした。ハラスメントの定義には、様々な場面における「嫌がらせ」「いじめ」などがあり、発言や行動などを実際にした方の意図には関係なく、それが相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えた場合、ハラスメントにあたります。主に、パワーハラスメント、モラルハラスメントが課題となっております。

三気の里は、男女混合チームであり、世代も違えば、業種も様々です。人間ですから、色々なことはあると思います。ハラスメントが起きる職場では、互いに気持ちよく働くことが出来ず、スタッフの士気も下がります。メンタルヘルスの不調をきたすなど、様々な問題が起こってしまいます。委員会では、啓発のポスターを提示して、先ずは、どのような行為や言動がハラスメントにあたるのかを意識してもらえようと思いました。スタッフが笑顔で互いを想い、仕事していくことが、一番の利用者さんへの還元だと思っています。

クラブ

「書初め」

支援員 伊藤 愛理

今年最初の芸術クラブは「書初め」です。お手本を見ながら書く方や、書きたい文字を書く方もおられ、みなさん楽しんで取り組まれていました。それぞれに違った作品が出来上がりましたよ！作業棟の廊下に掲示しています。



書き初め



2月スケジュール

2日(木) 1班給料外
 3日(金) 芸術クラブ
 9日(木) 3班給料外出
 11日(土) イベント食
 14日(火) 苦情報告会
 15日(水) 誕生日会
 16日(木) 囑託医来診
 2班・5班給料外出
 17日(金) Be TREEレク・ゴールドクラブ
 アンパの日

21日(火) 3班レク
 田中Drケースカンファレンス
 28日(火) 4班レク 5班レク
 毎週月曜日 訪問理容サービス

BeTREE
 <営業時間>
 8:00~18:00



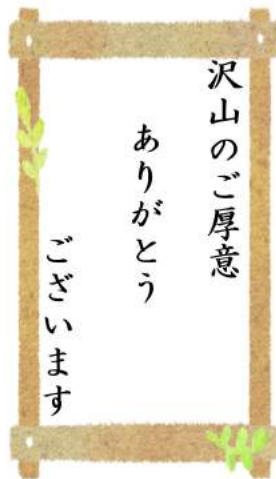
betree314

看護師便り

「三気の里の看護師となって」
 看護師 小崎 栄之

三気の里の看護師として今年で19年になります。障がい者支援施設の看護師は、広く全体を把握する必要があります。時間を共に出来るのは投薬の時間、通院の時間になります。特に、通院の時間を共有できることは、この仕事のやりがいにつながります。利用者さんと関わることは、利用者さんの家族と関わることだと思っています。保護者同伴の宿泊旅行や保護者との懇親会、保護者参加の行事等の経験から、利用者さんを見て保護者のお顔がうかがうこともあり、責任ある立場にあると常々感じています。以前は健康診断も上手に受けられず、通院の時も診察室に入れない利用者さんも多数いらっしゃいましたが、今では上手に受診できた成功体験を目の当たりにし、そのことを一緒に喜びることができることが、

この仕事の醍醐味と言えます。また、利用者さんの健康増進、疾病の予防、苦痛の緩和等を考え、体調の変化に迅速に対応していきたいと思えます。今後は利用者皆さんの健康管理に、更に力を入れていく必要性を強く感じています。



【寄付】
 松村 俊介様 今池 隆則様
 三気の里家族会様

【物品】
 財津 睦人様 中嶋 久枝様
 元田 道雄様 柴田 博子様
 魚谷 秀文様 田中 満子様
 宮本 眞一様 中村 秀隆様

白井 桂子様

【後援会ありがとうございます】

櫻木 勇夫様 清田 栄一様
 渡邊 正司様 松村 俊介様
 小牧 博則様 清藤 節子様
 金森 保様 東坂 富士代様
 角田 幸様 井手 上昌子様
 森川 琇介様 ヤマト 住建様
 三気の里家族会様

